

## IoT 推進ラボ IoT 支援委員会（第 3 回）結果概要

### 1. 日時・場所

日時：平成 28 年 12 月 6 日（火） 9：00～10：30

場所：経済産業省本館地下 2 階講堂

### 2. 参加者

○委員 25 名中、16名参加（うち代理出席 8 名）。

中川経済産業大臣政務官、安藤商務情報政策局長 他

○傍聴 約 150 名

### 3. 概要

○冒頭、座長及び経済産業省から IoT 推進ラボの活動報告を行い、今後の活動について議論。

○各委員から出された主な意見等は以下の通り。

#### 【IoT 推進ラボの今後の活動全般(今後の方針)について】

##### < I. これまでの活動の評価 >

- ・ 短期間に多くの施策が展開され、一定の効果が得られたとの評価。今後はこれまでやってきた施策を、もっと大きなムーブメントにし、大衆化していくべき。
- ・ オープンイノベーションで事業開発を行うというトレンドを後押しし、企業にある程度浸透してきたことは評価できる。IoT に係る企業間の提携や M&A 案件も増加した。

##### < II. ミッションオリエンテッドな進め方 >

- ・ 活動の下地はできたので、次のステップとしてミッションオリエンテッドで活動していくべき。ミッションの下に、業界の垂直統合形に閉じないクラスターを作るべき。スタートアップ企業も、ミッションオリエンテッドのものが伸びている。
- ・ 最重要課題は、生産性の向上（少子高齢化社会における介護問題など、特にサービス分野）。日本はミッションオリエンテッドな製品・サービスの開発などに非常に強みがあり、世界をリードできる。

- ・ 日本のどこにニーズがあるのか、それに対してどういうミッションを組み立てるのか考えることで、物事が前に進む。そういった形で、中国でも欧米でも、スピード感をもって市場が立ち上がってきている。
- ・ IoTは労働者から職を奪うのではなく、労働者のスキルアップを支援する等、生産性向上を補完するものとの理解を、政策の場等のディスカッションを通して深めることも重要。
- ・ 日本がIoTで世界をけん引していこうとすると、ブロックチェーン技術は無視できない。プラットフォームとして広がりのある話なので、テーマとして、取り上げるべき。

### <Ⅲ. ビッグデータ等の整備>

- ・ IoTへ投資をする人の約8割が、守りの投資（コストカットや人不足の解消のため）というのが現状であるが、それを攻めの投資（新しいソリューション、高付加価値）へと転換をさせる必要がある。転換を助けるのがビッグデータ、AIである。
- ・ ビッグデータを活用するためにデータをそろえる作業が必要である。データクレンジング、コード体系を整理するなどして、データセットが整うと、IoT、ビッグデータ、AIを活用したビジネスを容易に仕掛けていくことができる。
- ・ 個人のイニシアチブにゆだねる部分と、公として基盤を提供する部分の両輪が必要。国は、データの提供や計算リソースの提供等が大事である。例えば北部イングランドでは健康データやセンシングデータを、プラットフォームで提供している。

### <Ⅳ. 導入支援>

- ・ IoTに係るサービス、ソリューションの導入側への支援もされるようになったことは評価できる。ただし、少しアピール不足。
- ・ IoT推進ラボを通じてたくさんのソリューション、商品が生まれてきている。現場に導入されて価値を生まないという意味がなく、そちらに対しての支援をもう一步踏み込んで実施すべき。
- ・ 補助金の手続きをもっと簡素化し、活用する事業者の負担を軽減すべき。

### <Ⅴ. 投資・機会の提供>

- ・ IoTはシードステージの案件が多く、必ずしも我々が期待しているほど伸び

- なかったという印象。ミドルステージへ移る中で、経営人材と資金の本格的なマッチングを必要とするプロジェクトや企業が増えてくる。海外からの資金誘致によって、知恵、ノウハウ、ネットワークをリバレッジできると良い。
- ・ 非常に優秀な人材を瞬時に見出して多額の投資をするような機会や、社会人で起業したいと考えていて、アイデアも技術もあるという人々が独立に踏み出せるような機会を充実させてほしい。
  - ・ いろいろな部局、組織で支援プログラムが提供されているので、その間を有機的につないで、一連で強力にサポートできるよう全体を設計してもらいたい。

#### <VI. 今後に向けて>

- ・ IoT 推進ラボではこれまで発散(いろいろのステークホルダーの発見、これとこれがつながると面白いのではないかという発見)をしてきたが、効率効果やニーズを追及する、収束に向かうというポイントに来ているのではないか。
- ・ PoC レベルのものがたくさん出てしまって、誰もリターンが出ないという状況に陥りかねないのではないかと危惧している。クロスインダストリーのプロジェクトで、実証実験を超えた出口が見えるプロジェクトを推進すべき。
- ・ IoT を活用してビジネスに活かそうという点は非常に盛り上がり、非常に評価できる。日本製の生産装置はつながることが当たり前となった。IoT の次の課題は、つながった後どうするか、見える化してどうするか、という点である。モノだけでなく、そこから生成されるデータやそれをつかったアプリケーションが流通するマーケットプレイスができると、経済的にインパクトが生まれ、さらに多くの参加者を巻き込んでいくことができる。
- ・ 自前主義にこだわらず、日本の強みを活かしつつも、海外の先進的な技術や人材を有効活用し、うまく融合を進めていくべき。
- ・ 色々な種を撒いた。官ができることと民ができることを整理すべき。マーケティングを行い、人々の意識に根付かせる活動にシフトしていく必要がある。IoT 推進ラボは、官によるヘビーデューティなイベントに見えているので、IoT 全般を含めて、マーケティングが必要。
- ・ この情報革命のパラダイムシフトに乗り遅れないよう、経産省そのものが一番進んでいる IoT ユースケースになるべき。様々な IoT 技術を徹底的に使い、経産省の職員が IoT に関して一番詳しく知っているという状況を作ってもらいたい。

(以上)